

バッハの音楽と礼拝について

飯 島 隆

序

「バッハのカンタータはそれゆえけして孤立した現象ではない。～これらの曲はすべて、それが奉仕すべき礼拝ときわめて密接に関係している。バッハの教会カンタータを正しく理解しようとするなら、われわれはこの典礼の概略をまず知らなければならない。」¹⁾ (スメント)

「いかにしてカンタータがプロテスタントのなかにその地位を占めるにいたったかを理解するためには、宗教改革時代の礼拝の新秩序の考察から出発せねばならない。ルターは礼拝形式としてのミサを廃止したのではなく、本来のカトリック的奉獻儀式たる奉獻誦を除き、その代りに説教に確古たる地位を与えたのである。」²⁾ (シュヴァイツァー)

バッハはライプツィヒ在任中、教会音楽の責任者として要職カントルの地位にあった。当時カントルの役目として礼拝音楽の産出は当然の義務であった。バッハを通してルター主義教会における礼拝、音楽について明らかにしてみたい。

ルターと礼拝

キリスト教の礼拝は原始聖徒の時代より伝えられ行なわれてきた礼拝次第の拡大、進展である。ルターによる聖書のドイツ語翻訳は印刷機によって急速に民衆へ普及された。

ルター (Martin Luther, 1483~1546) は 1523 年に出版した「公礼拝に関する順序」(Formula Missae et Communionis pro ecclesia Wittenbergensi)の中で、ローマ教会が行っているミサが最後の晩餐から出発していることを認めながらも真に正しい方向へと向けられるべきであることを述べている。ルターの言う正しい方向とは、礼拝の改革を意味するものであるが単に儀

式の改革ということではなく神学的見地によるものである。1524年、ルターは伝統的骨子を回復したフォミュラ・ミサ出版に続いてドイツ語の讚美歌を編集し、翌1525年にはドイツ語による礼拝式、ドイツ・ミサ (Deutsche Messe und ordnung Gottisdiensts) を発表、1526年1月に序文を加えてこれを出版した。³⁾

礼拝式の順序を要約すると初めに讚美歌を歌い (ドイツ語による詩編)、次にキリエを三回。司祭が集祈をへ音で唱える。そして使徒書をオクターブ・トノ、集祈の単音と同じ高さで唱える。使徒書の後、ドイツ語讚美歌「今われわれ聖霊を祈る」を歌うかそれに類するものを歌う。続いて福音書朗読、信条をドイツ語讚美歌、説教が行なわれる。そして聖餐式に入りこの間ドイツ語讚美歌「神はたたえられる」、「我らの救い主イエス・キリスト」を歌う。最後は杯を祝福し歌われた讚美歌の残りを歌う。

ルターはドイツ・ミサの中で祭服、聖壇、燈火の有無について述べ、礼拝の細部に至るまで語っている。それは司祭の使徒書朗読、集祈についてのピリオド、コロソ、コンマについての規則や、その際司祭は使徒書で会衆に顔を向け、集祈では聖壇に顔を向けること、さらに福音書のキリストの声、人声の部分の規則にまで及び、その日語られる説教についてまでも述べている。ただドイツ語使用については降誕日、聖霊降臨、その他特別な祝祭日においてドイツ語の讚美歌を充分持つようになるまで従来通りラテン語で続けていくよう勧めている。

フォミラ・ミサ、ドイツ・ミサを比較してみよう。⁴⁾

- | ドイツ・ミサ | フォミラ・ミサ |
|---------------------|----------------------|
| 1. 開会の頌 (introitus) | ドイツ語の
讚美歌、詩
編唱 |

2. キリエ〈9唱様式〉 3唱様式
3. 栄光の頌
(Gloria in Excelsis) 除かれる。
4. 特別祈禱 (Collect)
5. 使徒書朗読 ドイツ語に
よる聖書朗
唱法
6. グラジュアル
(Grandualia) ドイツ語讃
美歌
7. 続 唱
〈聖誕, 聖霊降臨祭〉
8. 福音書朗読 ドイツ語聖
書朗読唱法
9. 信仰告白 (ニカイア信条) ドイツ語讃
美歌
10. 説 教 主の祈りと
パンぶどう
酒の配餐
11. 序 詞〈特別序詞〉
Verba, Sanc-
tus
12. 設 定 詞 感謝の祈禱
祝福
13. 主の祈り
14. 平安の祝福 (pax)
15. 配 餐
〈Agnus Dei〉
16. 感謝の祈り
17. ベネディカムス 祝福の前の
ベネディカ
ムス除かれ
る。ベネ
ディカムス
は祝福に含
まれる。
18. 祝 福
このドイツ・ミサは1525年ウッテンベルクの
教会で三位一体後第20主日に初めて用いられ
た。北ドイツではドイツ・ミサの礼拝改革が広
がったが南ドイツでは熱教派とそれに伴う倫理
的荒廃に対する反宗教改革運動の紛糾が続い
た。ルター正統派の思想が根強く残ったライブ

ツィヒやニュールンベルクなどはこの伝統が長
く続けられた。特にニュールンベルクでは1524
年以來ルターのフォーミラ・ミサを骨子とする
形式が18世紀中葉まで守り続けられたと言わ
れている。⁵⁾

ルターにとって礼拝は単純さであり会衆の参
加を意味した。彼による礼拝改革は新しい様式
を生み出すことではなく神学的に受け入れられ
ない点に対する変革であった。ルターにとって
母国語導入は会衆が真にキリストのパンとぶど
う酒とにあずかることと考えた。ルターによる
礼拝改革を要約するならば 1. ミサを単純化
したこと。2. ミサに用いられるラテン語を母
国語のドイツ語を導入したこと。3. 会衆のな
じみの歌を導入したことである。⁶⁾

バッハのメモ

バッハ (J.S. Bach 1685~1750) はケーテン
時代、最終任地のライプツィヒへ赴く前、同地
に招かれて待降節第一主日用カンタータ、Nun
Komm der Heiden Heiland BWV. 61. (いざ
来たれ、異邦人の救い主よ)が演奏された。⁷⁾ そ
の際彼の書きつけた礼拝順序のメモが残されて
いる。※このメモに従って当時のルター派教会
の礼拝と音楽との関わりについて明らかにして
みたい。

※ Anordnung des Gottes Dienstes in
Leipzig am I Advent-Sontag frühe.

- (1) *Præludieret*. (2) *Motetta*. (3) *Præludier-*
et auf das Kyrie, so gantz *musiciret* wird.
- (4) *Intoniret* vor dem Altar. (5) *Epistola*
verlesen. (6) Wird die *Litaney* gesungen.
- (7) *Prælud*: auf den *Choral*. (8) *Evangelium*
verlesen, (9) *Prælud.* auf die Haupt
Music. (10) Der Glaube gesungen. (11) Die
Predigt. (12) Nach der Predigt, wie gewöhn-
lich einige *Verse* aus einem Liede gesungen.
- (13) *Verba Institutionis*. (14) *Prælud.* auf die
Music. Und nach selbiger wechselseitig
prælud. v *Choräle* gesungen, biß die
Communion zu Ende & *sic porrõ*.^{8)a,b}

(1) *Prælu-dieret.* 前奏曲

この部分はオルガンによって自由形式による大きなファンタジー、トッカータなどが演奏される。

(2) *Motetta.* 経文歌

カトリックのミサでは Introitus (入祭文) に当たる部分で、ここではルター派の音楽家達によって残されたモテットが歌われる。モテットは主礼拝に歌われるだけでなく早朝礼拝、午後の礼拝、晩祈、晩課あるいは他の儀式などにも用いられた。バッハは必要以上のモテットを書くことはなかった。数多く残された中から選んで歌えばよかったのである。

(3) *Prælu-dieret auf das Kyrie, so gantz musiciret wird.* 前奏によるキリエ

ここは合唱隊による三部合唱によってキリエが歌われる。ラテン語では Kyrie, Christe Kyrie, eleison と歌われるがドイツ語では Kyrie, Gott Vater in Ewigkeit, Christe, aller Wert Trost, Kyrie Gott heiligen Geist と歌われる。通常文の“主よ あわれみたまえ”の部分に相当する。

(4) *Intoniret vor dem Altar.* 祭壇前の発唱

牧師によって祭壇の前から歌われる。その言葉は“Gloria in excelsis Deo……(天にいます神に栄光あれ)”。それに答えて合唱隊が“Et in

terra pax hominibus bonae Voluntatis (地に善意の人に平和あれ)”と答える。この部分は栄光の讃歌“Gloria”である。

(5) *Epistola verlesen.* 書簡朗読

牧師によって祭壇から使徒書簡が朗読される。この日、待降節第一主日に当てられた書簡はローマ 13, 11~14 が読まれる。

(6) *Wird die Litaney gesungen.* 連祈、合唱

牧師と合唱隊に“主よあわれみたまえ”が三度、交互に交唱形式 (Antiphon) によって行なわれる。連祈は行列でひざまづいて歌われたり時には平伏して祈られたりするが、起立しても行なわれる。

(7) *Prælu-dieret auf den Choral.* 前奏と讃美歌

オルガニストのコラール前奏によってコラールメロディーの数小節が奏され会衆讃美へと導く。ミサでは昇階唱 (Gradualia) に相当することがここでは教会暦 (kirchenjahr) にもとづく福音書、使徒書簡に関連する讃美歌 (Choral) が歌われる。この演奏されるカンタータ BWV 61 の原旋律、Ambrsius による“Veni Redanpte genitum”にもとづくルターの詩による“いざ来たれ、異邦人の救い主よ”が歌われたのであろうか。推測ほかない。(譜例1) 参照

(譜例1)⁹⁾

アンブローズ《来たれ、異教徒の救い主よ》

Ve - ni, re - demp - tor gen - ti - um.
Os - ten - de part - um vir - gin - e:
Mi - re - tur om - ne sæ - cu - lum
Ta - lis dec - et part - us De - i

ルター《来たれ、異教徒の救い主よ》上の歌を
もとにしている (Klug の Gesangbuch, 1533より)

Nun kom der Hei - den hei - land/
(Nun komm, der Hei - den Hei - land,
der Jung - frau - en kind er kand/
der Jung - frau - en Kind er kann,
das sich wun - der al - le welt/
dass sich wun - der al - le Welt,
Gott solch ge - purt jm be - stelt
Gott solch Ge - burt ihm be - stellt.)

(8) *Evangelium verlesen*, 福音書朗読

教会暦によって定められたこの日の福音書マタイ 21. 1~9 が牧師によって朗読される。シュヴァイツァーは当時ドイツ語とラテン語の使用について「祝祭日の讚美歌、使徒書簡、福音書朗読もラテン語によってなされていた」¹⁰⁾ と述べているがどの程度の割合で使用されていたかははっきりしない。

(9) *Praelud. auf die Haupt Music.* 前奏と主要音楽

オルガニストによる自由な即興演奏によって始まる。オルガンの前奏はカントルの合図によって演奏が停止され主要音楽 (*Haupt Musik*) が開始される。カントルによって作曲されたこの日のためのカンタータが用意され演奏されるのである。ここで演奏されたカンタータ BWV 61 (譜例 2) はアンブロジウスの原曲 (譜例 1) をもとにルターの詩によって改作されたコラールである。第一曲目はコラールの一節を各パートのユニゾンで歌い、「世にも不思議な出来事」の部分からフーガとなり再びコラール 4 声部でしめくられる。二曲目三曲目はテナーの *Recitativo* (朗唱) と *aria* (歌曲)。四曲目はバスによる *Recitativo* (朗唱), 関連記事ヨハネ福音書 3, 20 が歌われる。第五曲目はソプラノのアリア, 終曲のコラール「明けの明星いと美わしきかな」はキリストを迎える喜びを歌って閉じられるのである。「ヨハン・セバ스티アン・バッハは度々実にみごとな成功をおさめて説教のためにカンタータがあるのが, カンタータのために説教があるのかしばしば決めかねるほどだった。」¹²⁾ まさにアリア, レシタティーフにみられる宗教感情の豊かさはここにおいてバッハのもつ音楽能力が余ることなく生み出されている。

(10) *Der Glaube gesungen.* 信仰讚歌

ここはクレードに位置する箇所て神の言葉を聞いた会衆によって信仰告白が行なわれる。この信仰告白はニケア公会議(325), コンスタティノーブル公会議で確認され, ニケア・コンスタティノーブル・クレドと呼ばれラテン語による

Credo in unum Dem Petrem は *Wir glauben all an einem Gott* (我ら唯一の神を信ず) というルター訳のドイツ語によって歌われる。このニケア信教は教会暦の祝祭の変化, またそれぞれの教会によってラテン語やドイツ語によって歌われる。

(11) *Die Predigt.* 説教

牧師によって説教が行なわれる。当時ライプツィヒの主なるニコライ教会, トマス新教会の主礼拝は朝七時に開始され, 説教は一時間後の八時より始められ九時までに終了する慣わしであった。¹³⁾

(12) *Nach der Predigt, wie gewöhnlich einige Verse aus einem Liede gesungen.* 説教後讚美歌数節の歌唱

聖歌隊または会衆によって *Vater unser*…… (天にまします我らの父よ) が歌われ, 続いて洗礼歌, 聖餐式に導くための *Christ unser*…… *Herr zum Jordan Kam* (キリスト, 我らの主ヨルダルより来ませ), *Aus tiefer Not schreie ich zu dir* (我ら深き淵より汝を叫ばわる) が歌われる。

ルターによるドイツ語導入によって礼拝の会衆讚美も母国語で歌われるようになった。特にルターが詩編をもとにした *Ein Feste Burg ist unser Gott* (我らの神は固き城なり), ニケア信経で歌われる *Wir glauben all einem Gott* (我ら唯一の神を信ず), またこの日歌われたカンタータの旋律 *Nun komm der Heiden Heiland* (いざ来たれ, 異邦人の救い主よ) などこれらの曲は彼が編集した“*Etlich Christrich lider Lobgesang an Psulm*” (8つの聖歌集), “*Geistlich Gesang Buchley*” (ウッテンベルグ聖歌集)¹⁴⁾ などに収められたものである。ルター以後多くのドイツ教会コラールが生まれた。Matthias Greiter (1500~52), Paul Gerhart (1607~77), Georg Neumark (1621~81), Johannes Gruger (1598~1622) など17世紀敬虔主義の時代までには詩人, 牧師などによってドイツ福音主義教会の讚美歌はその数において増大された。この讚美歌は教会の会衆歌として定着し, 一方教会音楽家の創作源にも

Nun Komm, der Heiden Heiland

(譜例 2) BWV 61

(来たれ、異邦人の救い主よ)¹¹⁾

1. Overture (Chor). Sopr., Alto, Ten., Basso;

Sopr.
Nun komm, der Heiden Heiland

Takt 4

Gai deB sich wun-dert al-le Welt, al-le Welt, le Welt,
Alto deB sich wun-dert al-le Welt, al-le Welt, al-le
Ten. deB sich wun-dert al-le Welt, al-le
Basso deB sich wun-dert al-le

Takt 33

2. Recitativo. Ten., Org. e Cont

daB sich wun(dert)
Welt, daB sich wun(dert)
Welt, al-le, al-le) 93 Takte

Der Heiland ist gekommen, hat unser armes Fleisch und Blut an sich genommen 18 Takte

-le Welt

3. Aria. Ten; Viol. I, II e Vla. I, II (all' unis.); Org. e Cont.

Komm, Je-su, komm zu dei-ner Kir-che 110 Takte

Takt 17

4. Recitativo. Basso; Viol. I, II, Vla. I, II; Org. e Cont.

Sie-he, sie-he! Ich ste-he vorder Tür und klop-fe an,
senza l'arco 10 Takte

5. Aria. Sopr; Velli. (coll' Org.)

Öff-ne dich, mein gan-zes Her-ze
Adagio Bin ich gleich nur Staub und Kr-de 89 Takte

Takt 7

Takt 43

6. Choral. Sopr., Alto, Ten., Basso; Viol. I, II (all' unis.); Org. e Cont. (Vla. I coll' Alto; Vla. II col Ten., Fag.col Basso)

A-men, A-men! Komm, du schö-ne
A-men, A-men! Komm, komm, du schöne Freuden(krone),
A-men! A-men! A-men! A-men! Komm, komm, komm, komm

14 Takte

なった。バッハにおいて Greiter の名曲“人よ、
汝の大なる罪に泣け”は壮大なマタイ受難曲
の一部を締括る合唱となり、Haslar の“おお血
にまみれし汝の御顔”もその中でコラールとし
て生々とした位置におかれている。Neumark
の“ただ神の摂理にまかす者”はカンタータ
BWV 93, BWV. 21 の合唱となり、オルガン曲
となった。バッハのコラール旋律の使用は先代
作曲家が残したものをただ使用したというので
はなく、彼による新しく再生される力によって
無数のバリエーションとして拡大されたことで
ある。

(13) *Verba Institutionis*. 聖餐式告示

牧師によって祭壇から聖餐式開始の言葉が告
げられる。

(14) *Prælud. auf die Music. Und nach selbiger wechselseitig prælud. v Choräle gesungen, biß die Communion zu Ende & sic porrö.* 後奏と音楽

この(13)の聖餐式告示から(14)までは聖体拝領
に当たる。会衆はパンとぶどう酒によって聖餐
にあずかる。この間はオルガンの演奏、聖餐式
の歌が交互に続けられるのである。聖餐式が終
るまでこれが続けられ、終りに合唱と後奏曲に
よってこの礼拝は閉じられる。

教会暦と聖務日課

当時ルター派の教会では教会暦によって一年
間の行事がほぼ決定されていた。この教会暦は
一般の暦とは異なる方法によって実施されてい
た。この教会暦(Kirchen Jahr)とは宗教改革
以前よりローマカトリック教会に保持されてき
たものである。それは待降節から始まる半年間
とそれに続く聖霊降臨日から始められる半年間
(聖霊降臨日以後は三位一体主日と呼ぶ)から成
る一年間である。この中には聖母誕生の祝日、聖
母のお告げの祝日、聖母被昇天などマリア論
(Moriology)による祝日が古くから暦に取り入
れられていた。さらにヨハネの祝日、聖ミカエ
ル祭など聖者、殉教者を毎年記念する祝日が加
えられる。この殉教者や聖者を記念する祝日は
地域、時代の変動により異なるが、中世ではか

りの日数が教会暦の中に加えられたのであ
る。要約すると教会暦は11/27~12/3の間にあ
る待降節第一主日をもって開始され降誕日、割
礼日、顕現日、大斎始日、棕梠の主日、受難週
と復活日、昇天日、聖霊降臨日とそれに続く三
位一体日などによって年間プログラムを終える
のである。そしてこの中にマリアの祝日、聖者、
殉教者の祝日に加えられるのである。この暦に
は固定された祝日(降誕日12/25、顕現日1/6な
ど)と期日の変化する移動日(復活祭やそれに
続く聖霊降臨日など)とがある。また教会暦の
重要な祝祭日はHohen Festenと呼ばれ大きな
行事が行なわれたのである。¹⁵⁾

バッハは1723年3月26日金曜日、受難の晩
課のための音楽をライプツィヒ市から依頼され
た。これはヨハネ受難曲(BWV. 245)である。¹⁶⁾
バッハはこの時ケーテンの宮廷楽長の地位にあ
り、前年の11月にライプツィヒのカントルに応
募したのである。ヨハネ福音書のテキストをも
とにケーテンで練られたこの受難曲は、ライプ
ツィヒのトマス教会で演奏された。会衆である
ライプツィヒ市民はこの受難曲に充分満足した
ようである。晩課にこの大規模な受難曲を演奏
することは当時まだ新しいことであつたらし
い。これは1721年に開始され、以前は古いモ
テット形式による無伴奏で行なわれていた。こ
れがやがて礼拝で行なわれる福音書朗読の代り
となったのである。以後毎年ニコライ、トマス
両教会で交代に行なわれ、1766年以後晩課のた
めの受難曲は午前の礼拝に移り、後には廃止さ
れることになる。バッハの時代モテットがすで
に衰退してしまつたようにカンタータや受難曲
も教会への新しい思想の影響によって18世紀
中期以後急速に衰退してしまうのである。とも
あれ初期プロテスタントのシュッツやヴァル
ターの簡素な作品に比べ、バッハの受難曲はオ
ペラのaria(独唱歌曲)、Recitativo(朗唱)の
導入、そして壮大な合唱とルター派の讚美歌に
よって音画的厚みを増し、音楽様式、用法、要
素が総合され大成されたのである。

バッハの名曲であるマタイ受難曲(BWV.
244)は1729年4月15日、ライプツィヒのカン

トルに就任して6年目、聖金曜日の受難晩課のために作曲された。演奏はトマス教会の礼拝堂で午後1時15分に開始された。

1729年4月15日 晩課礼拝プログラム

コラール Da Jesu an den Kreuze Stand
イエス 十字架につきしとき

受難曲第一部

コラール O, Lamm, Gottes
おお、神の小羊

コラール Herr Jesu Christe, dich zu uns wend.
主イエスキリストよ、我らに目を向けたまえ

説教

受難曲第二部

モテット Ecce, quomodo moritur
見よ、いかにして死せしか

献金

コラール Nun danket alle Gott
いざ もろ人に感謝せん

祝 禱

17)a,b

二部にわたるこの受難曲は3時間を要した。加えて会衆讃美、説教によってこの日の晩課礼拝は午後5時過ぎにようやく終了した。このマタイ受難曲はヨハネ受難曲に比べ劇的ではないにしろ福音史家の語る記事を克明に描きながら、心にせまるアリアと合唱をもちながらも、晩課で演奏されるには余りにも長過ぎたのである。

受難日や復活祭と並び教会暦の中で最も大きな祭日は降誕祭である。クリスマスオラトリオ(BWV. 248)は1723年の待降節に向けて作曲された六つの部分から成る作品である。朝はニコライ教会、午後にはトマス教会で演奏される。またマニフィカート(Magnificat BWV. 243)聖母マリアの頌歌も1723年のクリスマス晩課のためのものであるが第二稿は1730年に手直しされた。バッハのラテン語による作品ロ短調ミサ(Hmoll Messe BWV. 232)や小ミサ(BWV. 233~236)はドレスデンの宮廷のアウグストに献上された。バッハによってロ短調ミサが作曲された理由は様々挙げることができるが当時のライプツィヒ教会では祝祭日にローマカトリッ

ク教会から受けついでラテン語による礼拝音楽が守られていたことを示している。

ライプツィヒの教会は通常朝5時半の早朝礼拝から始った。七時にニコライ、トマスの二大教会と新教会の主礼拝が開始される。説教は二時間後の九時までに終了し、続いて説教が行なわれて聖餐の式に移る。聖餐式はこの時参加する人数によって、礼拝が早く終るか遅く終るかが決定される。通常の礼拝はおよそ11時前後に終了した。続いて11時45分からは午後の礼拝が開始され、この礼拝では説教の前に二、三曲の讃美歌が歌われ、終りに一曲歌うだけの簡素なものである。祝祭日の礼拝はカンタータや規模の大きい音楽が演奏される。この場合午前よりトマス教会、午後にはニコライ教会と交互にカントル自身の指揮のもとに行なわれた。特に祝祭日の特別な礼拝では通常の礼拝より30分繰上げて早朝礼拝は朝五時開始とされた。^{19)a,b} 受難週から復活日に至る三日間、クリスマスなどの最も重要な祝祭日では午前、午後カンタータ、受難曲、ミサなどを演奏しなければならなかったのである。

このように教会暦という教会独特の暦に従って一年間のプログラムが決定される。説教、会衆讃美(Haupt lied)、その日の礼拝のために演奏される主要音楽(Haupt Music)までが教会暦の日課(pericope)によって決定されたのである。カントルはこの日の日課のもとにコラール、モテット、カンタータを作曲、選曲し、礼拝に備えたのである。

A・シェーリング(Arnold Schering)の「J. S. Bachのライプツィヒ教会音楽」(J.S. Bach Leipziger Kirchen Musik)によれば当時の教会と音楽についての詳細な研究が報告されている。¹⁹⁾ それによるとライプツィヒのトマス教会付属学校の中から選出された生徒による合唱隊員(常時54~56名)は与えられた義務を充分発揮出来るように訓練された。この合唱隊員は非常にすぐれた技術をもつ上級者から未熟な者まで多種の能力の幅をもっていたのである。この合唱隊はライプツィヒ市のもとに管理され、カントルによって絶えず厳しい訓練を受けたので

ある。彼らは能力別に4つの合唱隊に分類され各々の能力に応じた役目が与えられた。

第一の上級合唱隊は直接カントルのもとに指導を受け管理され、最もすぐれた歌手12名、補助者4名、リーダー1名から成っている。この上級の合唱隊は主日礼拝において市の二大教会であるニコライ、トマス教会で各週礼拝に参加しなければならなかった。第二の合唱隊は上級に次ぐ能力をもった生徒達によって編成された12名から成り、他に2名のリーダーが加えられトマス学校副校長のもとに管理されて上級合唱隊と交代でニコライ、トマス教会の礼拝に参加する役目を負った。第三合唱隊は経文歌合唱隊と呼ばれ助教師のもとに管理され市の新教会で活動した。第四合唱隊はもっぱらペテロ教会でドイツ讃美歌を歌い、8名の生徒から成っていたのである。

この合唱隊員はまた平日教会で行なわれる聖務日課(Breriariam)に参加しなければならなかった。この活動には主日礼拝とは別のグループ編成が組織されたのである。

月曜日早朝礼拝、ニコライ教会

歌手8名、リーダー1名

火曜日早朝礼拝トマス教会

歌手8名、リーダー1名

火曜日午後礼拝、新教会

歌手8名、リーダーなし

木曜日早朝礼拝、トマス教会

歌手8名、リーダー1名

金曜日早朝礼拝、ニコライ教会

歌手8名、リーダー1名

金曜日午後祈禱会、新教会

歌手8名

この他に欠員用1名、その週自由な者1名計54名によって編成された。

聖務日課は元来ローマ教会、東方教会において主日礼拝のほか毎日定められた時間繰返し行なわれる祈禱、聖書朗読を中心とした礼拝の慣しである。基本は朝課、讃課、一時課、三時課、六時課、九時課、晩課、終課から成り後になんり複雑になった。この日課もルターによって三つにまとめられ朝課、讃課、一時課を早朝礼拝

(Frühgottesdienst)とし、三時課、六時課、九時課を主礼拝(Hauptgottesdienst)とし、晩課、終課は午後の礼拝(Nachmittag gottesdienst)としたのである。²⁰⁾

聖務日課は修養より讃美と祈禱に強調点があると言われている。このローマ教会の慣わしはライプツィヒ時代のルター派教会において簡略された形ではあるが守られ、祝祭日の終りにはTe Deum(主をほめたたえよ)、Antiphon(詩編、讃詠の交誦)をもってなされたのである。

結 尾

バッハの残したカンタータはおおよそ300曲、そのうち現存するものは200曲余りである。現存する200余曲の大半はライプツィヒ時代のものである。それら一つ一つの作品はバッハ自身の礼拝に向けた宗教的表出であり、その表出の源はルターに始まりルター派の音楽家達の残したコラールであった。

引用文献及び注

- 1) F・スメント著、角倉一朗訳、バッハ叢書6「バッハのカンタータ」303頁、白水社
- 2) A・シュヴァイツァー著、浅井真男、内垣啓一、杉山好共訳「シュヴァイツァー著作集」12巻、88頁、白水社
- 3) M・ルター著、青山四郎訳「ルター著作集」第一集6より ドイツミサと礼拝順序、1526年、聖文舎
- 4) 「キリスト教礼拝辞典」岸本羊一、北村宗次編、371頁
- 5) 「キリスト教礼拝辞典」前掲書、373頁、IIルター派教会の礼拝史
- 6) 石田順朗著「牧会者ルター」95頁、二礼拝、聖文舎
- 7) A・シュヴァイツァー著、前掲書、179頁、ケーテン時代ライプツィヒに招かれて作品BWV. 61を演奏したという確かな確証はない。
- 8) a) Hans. J. Schulze, 「Bach-Dokumente」 Band I, p. 248, BÄRENREITER
b) W. Gurlitt 「Johann Sebastian Bach」 p. 78~82, BÄRENREITER
- 9) 「合唱事典」秋山日出夫編集、182頁、音楽の友社
- 10) A・シュヴァイツァー著、前掲書、180頁

- 11) W. Schmider, 「Bach Werke Verzeichnis」 p. 79, BREITKOPF & HÄRTEL
- 12) H・フランク著, 佐藤牧夫訳, 「バッハ」, 378 頁, 音楽の友社
- 13) F・スメントはバッハのこのメモについてキリエの前のラテン語による入祭文, 使徒書簡の前のラテン語集祈, 説教の前奏, 後奏の讃美歌の欠落を指摘している。F・スメント, 前掲書
- 14) 「合唱事典」前掲書, 181~192 頁
- 15) 「キリスト教礼拝辞典」前掲書, 88 頁, 教会暦
- 16) ヨハネ受難曲が 1723 年に演奏された確証はない。現在は 1724 年の聖金曜日に初演されたとする説が強い。
- 17) a) K・ガイリンガー著, 角倉一朗訳, 「バッハ」 94 頁, 白水社
b) クロード・レーマン著, 店村新次, 浅尾己巳子共訳, 「バッハ」 125 頁
- 18) a) シュヴァイツァー著作集, 前掲書, 176~180 頁
b) K・ガイリンガー著, 前掲書, 79 頁 (1)
- 19) A. Schering 「Johann Sebastian Bachs Leipziger Kirchen Musik」 BREITKORF & HÄRTER
- 20) C・V・パリスカ著, 藤江効子, 村井範子訳「バロックの音楽」, 288 頁, 東海大学出版

参 考 文 献

- V・ヴィイタ著, 岸 千年訳「ルターの礼拝の神学」
聖文社
聖書日課研究委員会編「新しい教会暦」日本基督教団
- 角倉一朗著「バッハ」音楽の友社
- L・ピノマ著, 石居正巳訳「ルター神学概論」聖文社
- P・ミース著, 高野紀子訳「バッハのカンタータ」
バッハ叢書, 白水社
- レイモンド・アパ著 滝沢陽一訳「礼拝」 日本基督教団出版部